

# 眼 科

文責：中山 昌子

## 概 要

今年度（令和3年4月1日～令和4年3月31日）の外来診療体制に関しては 受付業務は主に中川クラーク、ほか引き続き木村、引地看護師、医師 中山が担当、これまで通り月・水・金曜日の午前を初診・一般再診（予約なし）とし、火・木曜日に手術（午前）、レーザー治療、眼鏡・コンタクトレンズ調整等（主に火曜午後）を充て、未熟児外来を木曜午後に、各々予約再診で行った。昨年からは開始した再診予約（時間指定なし）も運用中。

入院に関しては、2月～3月にかけて covit19 クラスタによる病棟閉鎖で1ヶ月近く入院・手術の中止を余儀なくされ、白内障手術 89例と減少。昨年度は未稼働だった電子カルテシステム更新後の新たなパスは順調に稼働しているが、コロナ禍関連の対応等で適応拡大には至らず。やはり超高齢者や周術期に注意を要する基礎疾患、独居、あるいは緑内障や偽落屑・小瞳孔・小眼球、僚眼の失明などハイリスク例が多く、とくに間質性肺炎、膠原病、悪性腫瘍など基礎疾患の再燃・増悪や慢性化により急激に進行したステロイド白内障も増加。またコロナ感染や濃厚接触による手術延期、全身的にハイリスクで自ら感染を心配しての手術時期順延もあった。

## 診療内容

外来では新患総数（新規の診療録作成者）は434名。内訳は例年通り白内障（他院からの手術依頼も）、緑内障（健診後二次検査や別の症状での受診も）、糖尿病（視力低下での受診や主治医からの紹介、あるいは自主的な検診希望）、サルコイドーシスやシェーグレン症候群疑い、非結核性抗酸菌症に対するエタンブトール治療での紹介…。屈折異常、調節障害による視力低下や眼精疲労、頭痛、眼痛、飛蚊症、閃輝暗点等も従来通り。

小児ネフローゼ、視神経脊髄症、MGなどによるステロイド服用例の小児のfollowも増加傾向で、眼圧上昇例も見られたが、難治例でも抗体治療などによりステロイド減量できる症例が増え、長期に点眼治療を要する症例はなかった。

また、落屑緑内障で突然コントロール困難となる症例が多発、糖尿病網膜症でもPRP後にもかかわらず硝子体出血を繰り返す症例も少なくなく、これらの疾患の他、網膜剥離、黄斑円孔、網膜上膜など

での硝子体手術など当科で対応困難な疾患については 山口大学や下関医療センター等へご紹介、ご加療いただいた。

なかにはコロナ感染を懸念して受診を控えたり、長期間処方切れだった症例も見られた。

手術の内訳を下表に示す

手術患者数	89例
白内障	89例
緑内障	1例*
斜視、内反症	0例
外傷*・剥離	0例
眼瞼腫瘍	0例

\*；水晶体起因性緑内障

レーザー治療患者の内訳（初回治療のみ：同一眼での複数回治療は加算せず）を下表に示す。糖尿病網膜症については1例で2～7、8回施術

光凝固治療患者数	51例
後発白内障	9例
緑内障	3例
糖尿病網膜症	27例
網膜裂孔・変性症	9例
網膜動・静脈閉塞	2例
中心性網脈絡膜症	0例
網膜細動脈瘤	1例
未熟児網膜症	0例